

「え、まことにすまねえこんだけど、おらげの苗字を一ちよう見つくろって下せえ」

と、おそろおそろ願ひ出ました。

「たわけ者、苗字を見つくりろってことがあるか。しかし何だ。お前がたではいい考えもあるまい。よろしい。考えて仕わそう」

「へー、どうか、お生きして、福がさずかって、べっぴんの嫁さんが見つかるって、お目出てえところを一つ」

「馬鹿を申すでない」

てんで、とんだ寿限無ですけれど、こんな光景が日本国中に見られたそうです。

一人を引き受けると、地の者も

「どうぞお願い致します」

とくるから、ことわりきれない。これが門前市をなす有様で

「コレコン、押すでない。静かにいたせ。順番に並びなさい」

ガードマンが出て、交通整理をしたという大変な騒ぎで……まさか、そんなことはありませんが。

さて、お役人も始めのうちは真面目に考えて、もつともらしい苦学をつけていたのですが、一度にたくさ

んの人を相手では、たちまち苗字の品切れになってしまいます。

そこで、川のそばに住んでいるから「川端」だとか、橋の近くから「橋本」とか、「土橋」とか「石橋」、海が近ければ「浜辺」とか「磯辺」とかこじつけますが、それさえやがて種が付きまして、弱り果てた揚句、

「えーい、愚かな人民どもの苗字に頭を痛めるなんて馬鹿馬鹿しいわい」と

手当りしだいにつけたのが「浅利」「太古」「浜地」と魚介類の大安売り。

乱暴な話です。無責任な話です。けれどもウソや、作り話ではありません。

現に、平山政場にはそんな被害者の子孫が二人も居るのです。

とはいえ、こうした「歴史の破片」のような昔ばなしが、何の役に立つのでしょうか。

「……だから、君の先祖が悪いんじゃない」

と証明したつもりになっても、本人にとっては、先祖の「無罪証明」ではなくて、先祖の「無知の証明」としてしか受けとれず、かえって腹立たしさを増すだけかもしれないのです。

そんな苗字を迷惑に思い、恥かしさに身も細る思いを

している少年は、敏感で傷つきやすい感受性を持った少年は、実は被害者の子孫ではなく、被害者自身なのです。

スパイクでふまれた足の痛さに悲鳴をあげつつづけている人間なのです。

少しどもる癖のあるこの少年が、

「オッ、オッ、何はタコじゃない。人間だ」

と、ヒステリイみだいに叫びだすとき、私には何とも慰めの言葉がないのです。

そんなとき、私は或る一つの言葉を思い出します。

「サラミン・サラミラ」

武田アブジの口癖です。

朝鮮語で「人間は人間だ」という意味だそうです。

私がその言葉を口にすると

「発音が悪い」

と言って、平山親父が何度も訂正します。

何回発音しても、うまく言えません。

「サルミン・サラミラ」か

「サラミン、サルミラ」か

どっちにしたって、私はこの言葉が好きなのです。声に出さなくても、胸の中で何度でも繰返します。

そう言えば、武田アブジにも、太古とは違いますが、似たような話があるのです。

何の話をしていたときでしたか、私が質問したことがあります。

「アブジは北かね、南かね」

すると、アブジの顔色が変わり、赤くなってうなりま

した。

それまでが機嫌よくニコニコしていただけに、悪いことを聞いてしまったかな？ と、私は一瞬後悔しました。

が、彼は少し間を置いて奇怪な答え方をしました。

「南やけど、北や」

アブジが質問の意味を正確に理解していないのかと思つた私は、自分の質問をもっと良く判ってもらうために、くどくどと説明を始めました。

でも、その説明はすらすらと流れるような明快にはいかなかったです。

「いや、あのね、つまりその、朝鮮は今、北と南に別れているやろ。その北と南のことを言ってるんだけどね」

となりの国の悲劇的狀態を口にするのは、気の毒すぎで、事実でありながら「はばかりる思いがするのです」

「そうや、そやからア」

と彼は声を大きくしました。

「わしは、……エー、南やけど北や」

彼は明らかに興奮していました。興奮のために、自分

の言いたいことが言葉になって出てくるのに手間取って
いました。

やっと気持ちが落ち着いてから話してくれたことを要
約すると、次の通りです。

「わしは字が書けへんから、戦争が終ったあと 登録を
知人に頼んだんや。その知人が居留民団系の人やったの
で、勝手にわしを韓国籍にしてしまいよった。勿論わし
には無断でそうしたんや。ところがわしの生まれ故郷は、
今でいう北朝鮮や。え、そうすればわしはどうなる」

彼はそこで言葉を切り、私をにらみました。まるで私
がその書き替えの犯人のように。

「わしは帰るところがないんや。わしの外国人登録は韓
国籍になっとんねや。韓国の人間が北朝鮮へ行くことは
出来んのや。その逆もそやけどな。わしは政治のことは
判らん。そないなことはどっちでもええんや。そやけど
生まれ故郷には帰られへんのや」

「そんな無茶な」

これが精一杯の言葉で、それ以上の感想を私はさしは
さむことが出来ません。

たまの休みに同僚をさそい、カメラをかかえて飯場を
飛び出しても、こんなことばかり次々と思い浮かべてい
る私も、よほど因果な男なのかもしれません。